北海道で！縄文を知る　第６回

：縄文世界遺産〈かってにフットパス〉
入江・高砂貝塚で！ かってにフットパス

本文⑱ー⑲間：礼文チャス線にて
（カーブミラーで自撮り）

小杉　康（こすぎ　やすし）
北海道大学大学院文学院考古学研究室教授
埋蔵文化財調査センター長

1959年埼玉県生まれ。明治大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学（考古学専攻）。日本学術振興会特別研究員、国立歴史民俗博物館外来研究員、明治大学文学部助手を経て、現職。北海道大学埋蔵文化財調査センター長兼務。主要著書に『縄文のマツリと暮らし』（岩波書店）、『縄文時代の考古学』全12巻（共編著、同成社）、『はじめて学ぶ考古学』（共編著、有斐閣）、「火の考古学」（北海道大学考古学研究室研究紀要、第１号）など。日本考古学協会会員、北海道考古学会会員。

〈かってにフットパス〉の第３回目です。今回のコースは、前回の終点、室蘭本線の『有珠駅』①が起点となります。そして今回の終点は同じ室蘭本線の『礼文駅』㉗です。コース距離は34kmです（コースA）。実は、もう一つの終点があり、一駅先の『小幌駅』㉟です。ただし、『礼文駅』－『小幌駅』間は主に峠道（礼文華山道㉙）で、歩行距離プラス14km、その場合の全長は48kmとなります。１日の踏破距離としては少しきつすぎます。そこで１日目の宿泊を豊浦町市街地とします。そこまでの距離は起点『有珠駅』から16kmほど。これだとものたりませんので、市街地周辺で散策するのも面白いかもしれません。インディアン水車⑮や噴火湾展望公園⑯まで足を運ぶのもお勧めです。往復でプラス４kmほど、１日目の歩行距離は総計でほどよい20kmくらいです。２日目は豊浦市街地から礼文華を経て、終点『小幌駅』までの32kmとなります（コースB）。

【コースA】有珠駅～礼文駅：34km
【コースB】１日目）有珠駅～豊浦町市街地周辺散策：20km＝豊浦町市街地〈泊〉
２日目）豊浦町市街地～小幌駅：32km

今回は縄文文化のお話しからではなくて、直接〈かってにフットパス〉の紹介になってしまいましたが、これにはわけがあります。今回のテーマはこれまでと少し異なり、後半でお話しする「噴火湾北岸縄文エコミュージアム」だからです。

かってにフットパス

今回は、国土地理院地図：１/25000『洞爺湖温泉』『豊浦』『礼文華』『礼文華峠』の４枚です。

：≪アプタのみち≫コース
起点の有珠駅①から、ふれあい広場〈彫像：海の音〉⑨まで：歩行距離 約10km

有珠駅を下車して、いざ出発。さっそく、後半でお話しする「噴火湾北岸縄文エコミュージアム」のサテライトNo.１の**有珠６遺跡**②です。続いて、虻田に入るとすぐに縄文世界遺産の**入江貝塚**⑤と**高砂貝塚**⑦です。遺跡内容の詳細は本誌No.688掲載の角田隆志さんの『史跡入江・高砂貝塚』をお読みください。

▶①→②**有珠６遺跡**→③洞爺湖町歴史公園❶ビューポイント（これから歩くルートを一望する）→④（有珠から虻田へ）→⑤**入江貝塚**→⑥入江・高砂貝塚館→⑦**高砂貝塚**→⑧虻田神社→❷ビューポイント：龍山道（入江・高砂貝塚を上から望む）→⑨

：≪隧道（トンネル）のみち≫コース
⑨から礼文チャス線入り口⑱まで：歩行距離14km

かつて「蝦夷地三大難所」と言われた礼文華峠（本フットパス最後のコースです）を前にして、ここも海岸まで迫った山地が続きます。通行可能な箇所も限定され、一般自動車道も高速道路も、JRも旧国鉄路線も、重なるように走っています。すでに廃道となった旧道は、海岸断崖の上や山中の峠を通っていました。現在は隧道すなわちトンネルが完備しています。トンネル内を歩くのは、自動車の排気ガスと風圧のせいで歩き

づらいものですが、江戸期からの歩行の困難さに想いをはせて、めげずに歩きましょう（コースBでは、⑯で１日目は終了。豊浦町市街地内で宿をとります）。

▶⑨→⑩庚申塚・⑪プロビデンス号薪水供給之地記念碑→⑫クリヤ隧道→⑬チャス隧道→⑭豊浦神社・水神→（⑮インディアン水車→⑯豊浦町噴火湾展望公園）→⑰高岡第３・第２・第１隧道→⑱

：≪礼文チャス線と礼文華遺跡へのみち≫コース
⑱から礼文駅㉗（コースA終点）まで：歩行距離10km

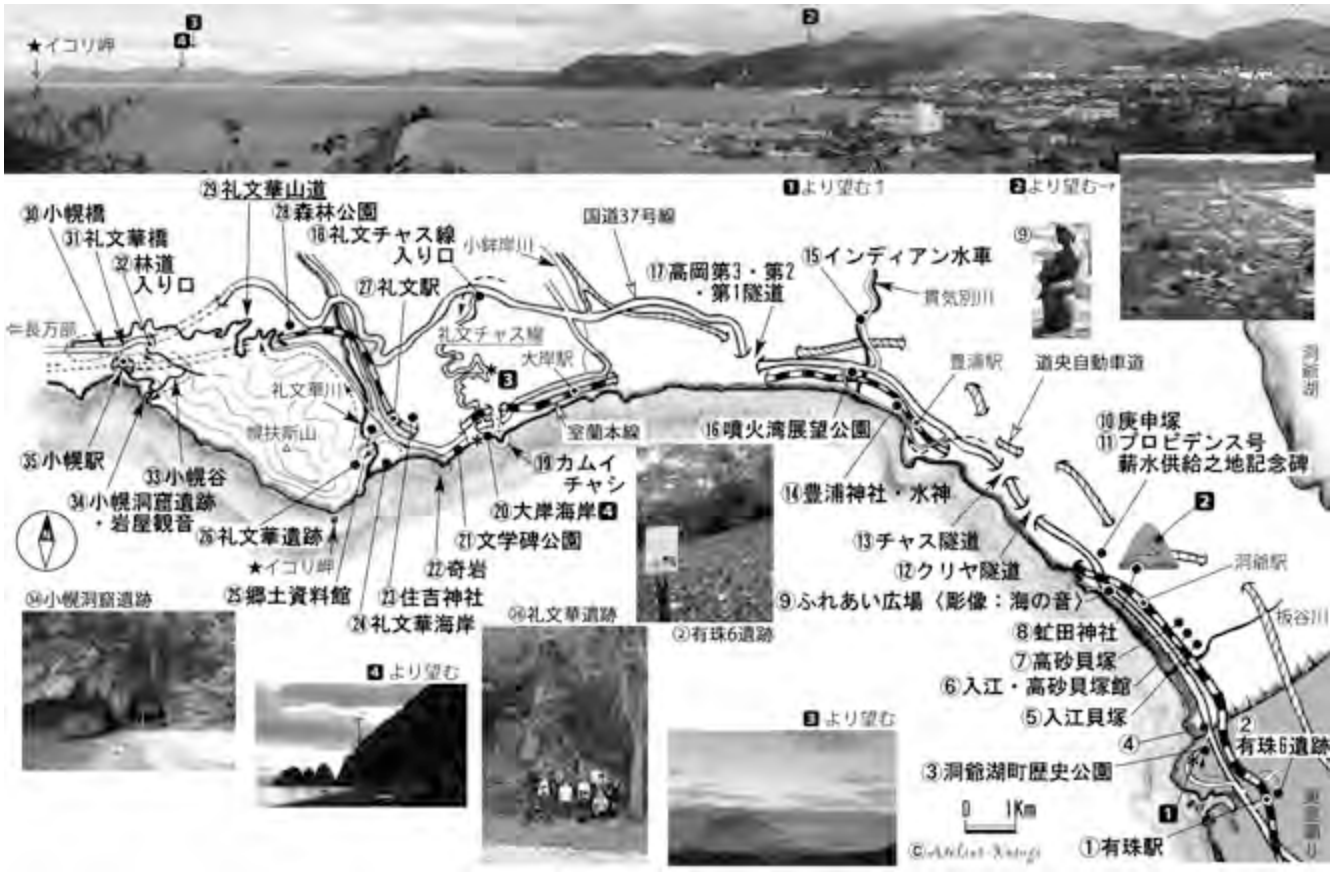
今回のフットパスでもっとも歩くのを楽しみにしていた**礼文チャス線**（⑱－⑲間）です。全区間、舗装されているので歩きやすかったです。歩行中は誰とも会うことはありませんでした。時期も時期なので、熊除けの鈴を忘れずに。大岸海岸から礼文華海岸へと、まさに風光明媚なところを歩き、クールダウンです（コースAは**礼文華遺跡**㉖を見学し、『礼文駅』㉗が終点です）。

▶⑱→3ビューポイント（大岸集落を望む）→⑲**カムイチャシ**→⑳大岸海岸4ビューポイント→㉑文学碑公園（与謝野鉄幹「有珠の峰／礼文の磯の大岩の／ならぶ中にも我を見送る」）→㉒奇岩→㉓住吉神社→㉔礼文華海岸→㉕郷土資料館準備室→㉖**礼文華遺跡**（サテライトNo.３）→㉗

：≪礼文華山道と小幌洞窟遺跡へのみち≫コース
㉗から小幌駅㉟（コースB終点）まで：歩行距離14km

さて、いよいよ礼文華山道㉙です。かの有名な明治期英国の女流探検家イザベラバードが歩いたことでも知られています。現在、峠の鞍部にさしかかる豊浦町側は山道の整備がきちんとされていますが、峠を越えるとだいぶ荒れているので、歩行可能かを事前に地元教育委員会か観光課に問い合わせることをお勧めします。

▶㉗→㉘森林公園→㉙礼文華山道→㉚小幌橋→㉛礼文華橋→㉜林道入り口→㉝小幌谷→㉞**小幌洞窟遺跡**（サテライトNo.２）・岩屋観音→㉟



噴火湾北岸縄文エコミュージアム

では、エコミュージアムとは何かを説明しましょう。野外に点在する見学対象を、自らの足で歩いて訪れて、見学して廻る、いわば「野外博物館」のようなものです。見学対象を「サテライト（衛星）」といいます。対象とする範囲を「フィールド」といいます（今回の歩行範囲がほぼ該当します）。見学者（参加者）は「散策の小径」を通ってサテライトを訪れます。サテライトの情報や経路案内をフィールドの中に設置された「コアミュージアム」で手に入れます。ミュージアム（博物館）といっても、案内・解説のための施設。主役はあくまでも野外のサテライトです。見学者は、自分の興味と体力に合わせて、尋ねたいサテライトとコースを設定し、その情報をコアミュージアムで入手して、いざ見学（散策）に出発です。このような見学対象や施設、それを維持するための組織、運営する人たち、これらの総体がエコミュージアム（活動）です。エコミュージアムを通して、見学者と運営者、周辺の住民の方々は、いっしょになってその地域の魅力を（再）発見し、理解し、学び、そしてより暮らしやすい地域として次世代へと受け渡す活動です。どこか〈かってにフットパス〉にも似ていますね。

「噴火湾北岸縄文エコミュージアム」（通称JEM）は伊達市から豊浦町までの海浜地域をフィールドとして、そしてサテライトとしては人類遺跡にウェートをおいたものです。2006年４月からこの名称を掲げて、活動を開始しました。建物ができて、そこから始まる通常の博物館とはちがい、それを作り上げる過程そのものがエコミュージアム（活動）だと私は考えています。コアミュージアムとして伊達市の「噴火湾文化研究所」（第４回マップ参照）の一角をお借りしました。サテライトとなる人類遺跡については、学術的な情報をしっかりと提供できるものでなければなりません。そのための調査活動が必要です。

私が所属する北海道大学の考古学研究室では、このエコミュージアム構想が始まる前の2000年８月（有珠火山の噴火があった年です）から開始した伊達市の有珠６遺跡（2000～05年）での発掘調査の成果を取り込んで、サテライトの選定･整備を行いました。その後、サテライト整備のための発掘調査は、豊浦町の小幌洞窟遺跡（2006～11年）、さらに礼文華遺跡（2012年～現在進行中）へと展開してゆきます。

有珠６遺跡

有珠６遺跡②は縄文早期から前期にかけての貝塚をともなった遺跡です。ここでの発掘調査は、氷期が終わって後氷期が始まる気候環境が激変する中で、また火山活動が活発でもある地域において、人類はどのように適応して生活してきたかを解明するために実施しました。調査の結果、北海道での最古級（約8000年前）の貝塚であることがわかりました。また、貝塚の他にも、縄文晩期の岩陰遺跡、さらに太平洋戦争の戦前からおそらく戦中にかけての産業遺産遺跡（あるいは戦争遺跡ともいえるかもしれません）からなる複合遺跡であることが判明しました。有珠火山は１万年前よりも以前に大噴火して山体の南西側が大きく崩れて、現在の有珠湾の方へと流れだしました。かつてはこれを「善光寺泥流」と呼んでいましたが、それは泥流規模のものではなくて、現在では有珠火山の「山体崩壊」と言っています。

前回のフットパスで長流川の河口右岸（≪若生・有珠のみち≫コース④地点）から台地の急坂にさしかかったのは、そのためです。この高台が山体崩壊によってつくられたもので、今回向かう虻田町市街地の南東端④まで続いています。前回話題としたアルトリ海岸に散在していた巨大な安山岩はその時のものです。噴火から数百年が過ぎ、周辺の海浜環境や森林植生が回復してくると、人類もこの地に再び訪れて、山体崩壊で運ばれてきた丘陵（「流山」といいます）斜面に顔を出している安山岩の岩陰に貝塚を残すまでの暮らしになったのです。その後、縄文人はこの場所をいったん離れて、狩りなどの際のキャンプ地として再びその岩陰を利用しました（縄文晩期）。さらに時は過ぎ、戦前・戦中には、この丘陵斜面に露出している安山岩をダイナマイトで粉砕して、室蘭築港のための石材として運び出しました。破壊された安山岩露頭と爆薬を仕掛けた痕跡が残っています。産業遺産（あるいは戦争）遺跡でもある理由です。

小幌洞窟遺跡

小幌洞窟遺跡㉞は縄文海進（第４回参照）の際に小幌海岸に形成された海蝕洞窟に残された遺跡です。小幌海岸は十数mの高さの屹立する崖に背後をとり囲まれ、一面を小さな円礫に覆われた幅30mにも満たない小さな海岸です。遺跡を訪れるためには、通常はJRの全国最秘境駅（！）として名高い『小幌駅』㉟から断崖を見下ろす山道を20分ほど降らなければなりません。

この遺跡は続縄文期と擦文文化との貝塚として、また「動物考古学のメッカ」として以前から知られていました（動物考古学とは、動物と人間との関係を動物学の専門的知識に基づき探求する考古学内の一研究分野です）。私たちの発掘調査の結果、そこでの人類の活動が遅くとも縄文晩期にまで遡ることや、アイヌ文化期まで貝塚が形成され続けていたことがわかりました。なお、小幌海岸は戦後まで漁場として使用されていました。

さて、眼前に広がる内浦湾（噴火湾）には、冬季にオットセイの雌と幼獣が越冬のためにやってきます。続縄文や擦文の人たちは、オットセイ猟のためにこの地にやってきたのです。貝層からは土器や石器も多量に出土するので、年間を通してここで暮らしていた可能性もありますが、季節を限定したキャンプ地とも考えられます。少なくとも土器を製作して供給した場所が他にあるはずです。そこが母村となる遺跡かもしれません。

礼文華遺跡

礼文華遺跡㉖は、小幌洞窟遺跡から絶壁の海岸線を東に約５㎞向かった、礼文華川の河口近くの右岸、幌扶斯山の山裾にある続縄文期の遺跡です。本州以南では縄文文化が終わり、水稲耕作を行う農業社会が始まると、それを弥生文化のはじまりとしています。その同じ時期の北海道の人々の暮らしが「続縄文時代（文化）」と呼ばれています。しかし、米作りは行われずに、以前の狩猟漁撈採集の生業が続きます。私はその点を評価して、「続縄文時代（文化）」とは呼ばずに、縄文文化の内の、「晩期」に続く一時期として「続縄文期」と呼んでいます。礼文華遺跡はその時期の遺跡です。当然、弥生文化へと移行した本州の農耕社会からの新たな文化要素の流入や人々の来訪があったようですが、その実態を明らかにしたのちに、縄文とは別の文化として扱うべきか否かを評価したいと考えています（話しが少し難くなりましたね）。

さて、礼文華遺跡の発掘調査を行うと、遺跡の全体から多くのイルカ骨が出土しました。小幌の続縄文期とほぼ同じ時期のものです。また、イルカなどの海獣類を仕留めたと思われる銛の先端（骨角製銛頭）がたくさん副葬されたお墓も発見されています。すご腕のイルカ猟師のお墓だったのでしょう。オットセイ猟に特化したキャンプ地的な小幌に対して、礼文華遺跡はイルカ猟が盛んに行われた集落遺跡だったようです。

夢破れても

以上が、「噴火湾北岸縄文エコミュージアム」のサテライトの３遺跡です。しかし、残念ながらJEM開設約十数年が経過して、この活動は頓挫してしまったようです。原因ははっきりしています。私の力不足と言ってしまえばそれまでですが、毎年夏季に実施する発掘調査（２～３週間ほど）の際には、毎回、地元の方々から絶大な応援をいただき、また交流も活発になるのですが、当期の発掘調査が終了し大学生活に戻ると、日常の大学業務にかまけて、当初予定したインターネットを通じてのコアミュージアムとの連絡や情報更新もままならず、地域の皆さんとの連携が薄れてしまったことです。〈遺跡〉は日常的に見守るあたたかい視線がないと育たないのです。発掘調査では新たな多くの学術的成果が得られましたが、その果実を考古学界にのみとどめることなく、遺跡が残されていた地域でこそ生かされるべきだと夢想してきましたが未だ果たせずにいます。私も還暦を過ぎ、JEMでの巻き返しは無理のようです。後を託す思いで、本誌の連載のために歩いています。夢破れても〈かってにフットパス〉あり、です。

（情報：コースA 歩行日2022.10.31）
（情報：コースB㉗－㉟間 歩行日2022.9.11）